

# 『諸国ばなし』 卷五の六 「身を捨て油壺」 から『好色一代女』へ

— 『好色一代女』の出発点に関する考察 —

梁 先 希 \*

(e-mail : ysh1231@hanmail.net)

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 物語内容における接点
  3. 構成上の接点
  4. 一人で暮らす女
  5. 「身を捨て油壺」から『一代女』へ
  6. おわりに
- 
- 

## 1. はじめに

貞享三（一六八六）年に刊行された『好色一代女』（以降、『一代女』と略す）は、老女の懺悔物語の形式と、一代記風の長編小説の形式をとる。このような作品の構想には、その内容から色道秘伝書である『たきつけ草』『けしずみ』を始め、『遊仙窟』『九相詩』等の影響があるといわれる<sup>1)</sup>。このたび検討したところ、さらに貞享二年に刊行された『西鶴諸国ばなし』との関連も見えてきた<sup>2)</sup>。『西鶴諸国ばなし』（貞享二年刊）巻五の六

---

\* 韓国外国語大 日本語科 講師 日本近世文学

1) 『決定版対訳西鶴全集（三）』解説参照。

2) 『決定版対訳西鶴全集（五）』解説は、『諸国ばなし』は、西鶴の他の作品と文章、内容の上で共通している部分があるという。一方、宗政五十緒氏（『井原西鶴集（二）』解説、小学館）

「身を捨て油壺」（以降、「身を捨て油壺」と略す）には、一人で暮らしてきた老女の話が描かれている。この短篇の人物設定や主題には、『一代女』と類似点があり、前者は後者の原形であるように思われる。そこで、本稿では、「身を捨て油壺」が『一代女』の形象化や、その構想に与えた影響について考察したい。

## 2. 物語内容における接点

まず、「身を捨て油壺」『一代女』のそれぞれの内容を略述し、両者の接点となる部分を指摘することとする。

「身を捨て油壺」の内容は、次のごとくである。

河内の国の平岡の里に、昔は由緒のある人の娘で、容貌も人に勝れ、奇麗な女がいた。この女はどういう因果か、一緒になった男はみんな死んでしまい、その男たちの数は十一人までとなった。その後は、女と付きあおうとする男も現れず、十八才の時から、自然に後家のようにになってしまい、八十八才まで一人暮らしをしてきた。女は木綿作りの仕事をしているが、その生活は窮乏し、夜に神殿の油をぬすむまでとなる。一方、神官たちは、神殿の油がなくなるのを不思議に思い見張っていると、山姥のような鬼女が現れるのを目撃し、弓で殺してしまう。明るる朝、その死骸を見ると、例の評判の高い老女であり、誰一人も不憫に思う者はなかった。

また、『一代女』は、次のようである。

主人公は、もともとは由緒のある家に生まれ、宮仕えをしていたが、十三才の時、若い侍と恋をしたのが発覚し、当人は宇治の実家に追放され、男は死刑となる。その後、舞子となり、ある西国の夫婦に可愛がられ、息子の嫁に望まれるが、夫へ手を出したことから追い出される。その後、美しい容貌であったことから大名の妾となるが、寵愛が過ぎるのを家老たちに疎まれ、実家に戻される。十六才の時、親の借金のため島原に身売りされ、太夫となるが、気ままな客あしらいのため評判が悪く、天神におとされる。三人の馴染みの客は没落し、主人公は病気のために醜くなって客に見捨てられ、囿女郎にまで落ちぶれた。局女郎となった一代女は、十三年の年季が明け、実家に帰る。その後、寺の大黒、女祐筆、町

は、『西鶴諸国ばなし』は、『好色一代男』『好色二代男』につぐ、西鶴の第三作の浮世草子として刊行されたのであるが、制作順と刊行順とは必ずしも一致しないはずであるといい、原『好色一代男』・原『好色二代男』・原『西鶴諸国ばなし』の成立の順序については、実証資料を欠くので述べないが、西鶴の浮世草子諸作品の成立は、原『西鶴諸国ばなし』を原点において、この作品の諸篇から、本書以後の諸作品は直線的に発展し、あるいは文脈の変更によって成立した、と考えるならば、かなりの作品の成立についての理解が容易になると、指摘する。

家の腰元、武家の表使女、歌比丘尼、お梳、お物師などを経て、ついに私娼に落ちぶれ、暗物女、旅籠屋の客引き女、さらに新町で遣手となるが、そのあくどさから居づらくなり、町はずれ玉造に移る。生計に追われ、惣嫁となるが、誰も相手にしてくれる男もなく、やめてしまう。この時六十五歳であった。大雲寺に詣で、五百羅漢像を見て、昔馴染んだ男たちを思い出し、気をうなってしまう。広沢池に身を投げようとしたが、よしみのある人に引き止められ、草庵に住み、念仏三昧の日を送る。

「身を捨て油壺」は短編、『一代女』は長編であり、内容面からも相当の差がある。しかし、両者には、大きく次の二点において、主題や人物設定に接点がある。

- (I) 女一人で一生を過ごしてきた零落の老女が主人公であること。
- (II) 両書の主人公とも、由緒ある家の娘で、天性の美貌に恵まれたこと。「身を捨て油壺」の主人公は、過去につきあった十一人の男がみんな死んでしまうという異常な運命にあり、『一代女』の主人公も、彼女と関係を結んだ男は死去するか、生命の危機に陥るか、または没落するなどしていること。

では、構成上にはいかなる接点があるのだろうか、次に取り上げたい。

### 3. 構成上の接点

まず、両作品が展開される過程を対比してみよう(◎は類似点、×は相違点、☆は分岐点)。

「身を捨て油壺」	『一代女』
▶ 《発端》	
× 「ひとりすぎ程、世にかなしき物はなし」と、話ははじまる。	× 「美女は命を断斧と古人もいへり」と、話は始まり、嵯峨の庵に住む老女に、二人の若い男が訪れ、彼女が語る過去の一生を聞く、という。
◎ 主人公は、「河内のくに、平岡の里に、むかしはよしある人の娘、かたちも人にすぐれて、山家の花と、…」と、由緒のある家の娘で、美しい女であると描かれる。	◎ 主人公は、「そもそもいやしからず、…、我自然と面子なよやかにうまれ付しとて」と、由緒のある家の子孫で、美貌に恵まれたことが描かれる。
◎ 主人公は、「いかなる因果にや、あいな	◎ 主人公は、「十一才の夏はじめより…」

れし男、十一人迄、あは雪の消るごとく、むなしくなれば、…」と、異常な運命の女性として描かれる。この時、主人公は十八才である。

▶ 《展開》

☆ 「十八の冬より、おのづから後家立て、八十八になりぬ」と、主人公は、十八才から一生を女一人で暮らしてきたという。

▶ 《結末》

× 生計を立てるために木綿作りをしていた老女（八十八才）は、灯火の油にことをかき、平岡明神のお灯明の油を盗み、夜なべにしていた。が、結局その罪は死を招く。

と、官女となったが、青侍と恋愛したのが発覚され、宮から追い出され、相手の男は死刑されたという。この時は十三才である

☆ 宇治の実家に追放された主人公は、「舞子」となる。「大名の妾」に選ばれ、殿の寵愛をうけるが、衰弱されていく殿を心配した家老たちによって、主人公は追い出される。十六才の時、家の借金のため、「島原の太夫」となる。その後、「天神」「囃女郎」「局女郎」を経て、「寺の大黒」「女祐筆」「腰元」「表使女」「歌比丘尼」「お梳」「介添え女」「お物師」「茶の間女」などに勤めるが、段々落ちぶれ、「暗物女」「旅籠屋の客引き女」を経て、「新町の遣手」となるが、みんなに嫌がられ、町はずれ玉造に移り、「惣嫁」となるが、相手にされない。この時六十五才である。

× 大雲寺に詣で、五百羅漢像を見た老女は、昔男たちを思い出し、気をうしなう。広沢池に投身しようとしたが、昔のよしみのある人にとめられ、草庵での念仏三昧の日々をおくる。

上に、両作品の類似する箇所を示したが、相違点があるのも事実である。それは、「身を捨て油壺」は、「姥か火」の伝説を素材にして、創り上げた不思議な世語りであるに対し<sup>3)</sup>、『一代女』は、老女の懺悔物語・一代記という形式をとり、創られた好色物であるためであろう。

3)延宝七（一六七九）年刊『河内鑑名所記』巻五「姥か火」には、次のようにある（『上方芸文叢刊3』（1980）、八木書店）。

此因縁を尋に、夜る夜る平岡の明神の灯明の油を盗侍る姥有しに、明神の冥罰にやあたるらし。彼姥なくなりて後、山のこしをとびありく光り物いできて、折々人の目をおとろかしけるに、彼火炎の体ハ死しける姥か首よりしてふきいたせる火のここと見え侍る故ニ、かの姥か妄執の火にやとて、則世俗に姥か火とこそつたへけれ。高安・恩知迄も飛行、雨けなどにハ今も出るとなり。

では何故、「身を捨て油壺」は、『一代女』の原形であるといえるのか。

両作品の内容の展開過程を三段階にわけた場合、両端の内容は異なるものの、冒頭部の主人公に対する描写が類似している。「身を捨て油壺」では、「むかしはよしある人の娘」とあるに対し、『一代女』は、「そもそもはいやしからず、母こそ筋なけれ、父は後花園院の御時、殿上のまじはり近き人のすゑすゑ、世のならひとてをとろひ」と、具体化されているのは、前者が、長編に発展する以前の形であったことを推測させる。

また、第一節でもふれたように、両作品の主人公は、平凡な人生を歩む女性ではないことも合致する。両作品とも、主人公と関係をもった男たちは死去するか、落ちぶれてしまうのである。ここからも、「身を捨て油壺」から『一代女』へ発展した様子がうかがえる。

「身を捨て油壺」には、「いかなる因果にや、あいなれし男、十一人迄、あは雪の消るごとく、むなくれば」とあるように、主人公が置かれた不幸な状況を、「因果」という言葉を用い、運命であるがごとく説明している。これに対し、『一代女』は、巻一の「老女隠家」に、次のように記す。

初通よりして文章、命も取程に、次第々々書越ぬ。いつの比か、（一代女も）もだもだとおもひ初、逢れぬ首尾をかしこく、それに身をまかせて、浮名の立事をやめがたく、

主人公が宮から追い出され、相手の男が死刑となった状況を、主人公の行動をもって説明しているのである<sup>4)</sup>。つまり、主人公が置かれている状況について、具体的な原因とそれに対応する結果を描きだす『一代女』の方が、「身を捨て油壺」より、進化した形であると言えるのではないだろうか。

一方、上の表で☆を付した箇所は、「身を捨て油壺」が、『一代女』へと、発展する分岐点であると考えられる。「身を捨て油壺」の主人公の描写は、「十八の冬より、おのづから後家立て、八十八になりぬ」とあるように、十八才から八十八才までの七十年間を後家のように暮らしたとあるだけで、他は何も描かれていない。珍奇談という性格もあり、具体的に何かを描くより、それは想像の世界にまかせ、省略しておく方がむしろ面白いということもあっただろう。しかし、その省かれた部分は、『一代女』に至り、存分に描写され、それによって作品が活きている。全六巻二十四章という長編のなか、舞子（巻一の二「舞曲遊興」）より、惣嫁（巻六の三「夜発付声」）に至る様々な職歴を記述した部分が、「身を捨て油壺」で省かれた主人公の半生に該当すると想定されるのである<sup>5)</sup>。

4) 『一代女』において、主人公の主な行動様式は、いたずらの行動、または過剰な性欲により、男たちを哀えさせ、零落させる一方、主人公の当人も落ちぶれていく（結果的に不幸な道を歩む）というのであった。たとえば、巻一の二「舞曲遊興」、巻一の三「国主艶妾」、巻二の四「諸礼女祐筆」、巻三の一「町人腰元」、巻三の三「調謔哥船」、巻四の二『墨絵浮気袖』等々多数。

5) 野間光辰氏(1983)（『刪補西鶴年譜考証』,中央公論社）は、『一代女』に対し、「正月人日、嵯峨の好色庵に二人の若男が主の老女を訪ねて、その身の上物語を聞くといふ筋。大内の宮仕の身か

## 4. 一人で暮らす女

ことに、「身を捨て油壺」が、『一代女』へと発展したと考えられるのは、『諸国ばなし』目録部、巻五の六「身を捨て油壺」には、次のごとくあるように、話の趣旨が「後家」という一人暮らしの女にあることを表している点である。

㊦ 身捨る油壺 後家  
河内の国平岡にありし事

この点こそ、『一代女』にもっとも類似しているのである。次に、西鶴作品に描かれている「後家」の例を取りあげ、西鶴が「後家」をいかに捉えているのかを探ってみたい。

天和元（一六八二）年に刊行された『好色一代男』巻二の二「髪きりても捨られぬ世」には、次のようにある。

「いたづらはやめられぬ世の中に、後家程心にしたがふものはなき」と、或人の語りぬ。  
（中略）いつとなく前載は落葉に埋み、軒も葺時を忘れ、雨の洩夜、神鳴のなる時は、ちかよきて、あたまで隠せし事、こはき夢見ては、「申々」と起せしなど、今おもへば、独身はと悲しく、仏の道にこゝろざし、紋所の着物もうとみはてゝ、世をわたる種とて、元来商いのとくい、殊更にあしらい、手づから十露盤をかんがえ、銀みる利発も、女は埒のあき難き事もありて、万、手代にまかすれば、いつとなく我になつて、様といふ尻声もなく、大形は機嫌とりて、むやくしき事も、程すぎて、こゝちよき下主共の咄しより、与風こゝろ取乱して、若きものなどゝ名の立こそおかし。

女の独り暮らしの悲しさ、辛さのため、いつのまにか、「こゝちよき下主共の咄しより、与風こゝろ取乱して」と、手代などと、浮き名が立つようになったとある。

貞享元（一六八四）年刊『諸艶大鑑』巻五の五「彼岸参の女不思儀」には、次のような「後家」が描かれている。

男女中に、けふの七不思儀は、二十四、五の後家と見えて、あたら黒髪を切て、風俗も浮世を捨て、すてず。紋なし鶯茶の物を着とおもへば、下は紫鹿子のひつかへし、左に壺本しきみをさげて、先立れしつれあひの事計おもふやうに見へしが、右の手より袖香炉出して、下女につがせて、然も白齒なり。

ら島原の太夫となり、境遇の変化と共に次第に転落して、天神・鹿恋・寺小姓・大黒・女祐筆・腰元・歌比丘尼・（中略）人生の暗黒面を体験して来た老女の懺悔物語である。（中略）本書の小説的脚色を除いたものが、つまり『好色訓蒙図彙』（貞享三年刊）・『好色貝合』（同四年刊）の類である」という。

これは、遊客が、天王寺彼岸参りする女たちを品定めする場面であるが、その最初の対象が後家であったと記されている。「黒髪を切て」とあるが、「下は紫鹿子のひつかへし」、「右の手より袖香炉出して、下女につがせて」とあるように色香が漂う。「然も白歯なり」というのは、未婚の女性のように装ったというのであろう。

また、『諸国ばなし』より後年のものであるが、元禄元（一六八八）年刊『好色盛衰記』卷五の一「後家にかゝつて仕合大臣」には、「此女に二つになる娘の行すへを思ひやりて、若盛に後家たてすまして、身をかためけるを、今のいたづらの世にくらべて、此人、女の鑑といへり」のように描かれた後家が、後に「こんな所は跡先のおもはく見かへらず、木陰に立しのべは、後家手を取て引入る」とあるように、密通するありさまがある。

無論、右の例などの外、女独りの世帯であっても、その辛さを耐え、家を立派に再建した後家の例もある<sup>6)</sup>。しかし、後家の心が乱れ、男と浮き名がたつのを、譬えた内容が、『諸国ばなし』と同年刊『椀久一世物語』卷下の三「借着の袖はあはぬ昔」に「後家と云ふ後家に霞のかゝらぬ後家もなし」とあるのを、注意しなければならない<sup>7)</sup>。

つまり、「後家」という語には、好色的な要素が濃厚であることがうかがえる。このことが、「身を捨て油壺」から『一代女』へと、拡張させる一つの要因となったのではないかと、考えられるのである。

もう一つは、『好色一代男』卷三の六「木綿布子もかりの世」には、路上で客を引く私娼の惣嫁について描いている。そこには、次のようになる。

「其所作は」と尋ける。或は縁遠き女、又は四十におよび独過の口鼻、昼はふせりて、暮より身ごしらえて、古着をぬぎ捨、脇あけの鼠色、黒き帯にさまをかゆると、はや暗かりにてつかむ事ぞかし。（中略）見世門も明はなれ、それより足ばやに成て、露次に走入ば、人の目をしのぶこゝろもやさし。（中略）死なれぬ命の難面くて、さりとて悲しくあさましき事共、聞になを不便なる世や。泪は雨のふる夜は、下駄からかさまでも損料出して、思へばかりのうら店、三十日も定なく、あそこに隠れ爰に替へて、家請の機嫌を取、小半酒に両隣をかたづけ、たばね木の当座買、頓而立きゆる煙なるべし。夜発の輩、一日ぐらし、月雪のふる事も盆も正月もしらず。

6) 『日本永代蔵』卷一の五「世は欲の入札に仕合」には、夫の死後、多額の借金が残され、しだいに貧しくなった家を、後家の知恵で再び興した内容が描かれている。

7) 「後家」について、『西鶴大矢数』卷一には、次のような例がみえる（『定本西鶴全集（第十一卷下）』中央公論社）。

52 適乗たり春の山道 (第六)

53 よい声で諷ふた所引霞

54 人目も恥よ後家のいたづら

前田金五郎著(1986)『西鶴大矢数注釈（第一巻）』（勉誠社）によると、53の句の付合は、「乗たり」→「諷ふた」、「春」→「引霞」であり、54の句の場合は、「霞」→「後家のいたづら」であって、54の句意は、「（前句を、よい声で諷っている所へ盃を取らせ、文字通り飲めや諷えのありさまである、と解釈し）、そんな遊興をして、人目を恥じなさいよ、後家の色事に」という。

惣嫁に勤める女たちを描写したなかに、「或は縁遠き女、又は四十におよび独過の口鼻」とあるのに気づく。前述したように、「身を捨て油壺」の主人公が、十八才からは男との縁もなく、独り暮らしの女となったのが想起されるくだけである。つまりここは、「身を捨て油壺」の主人公が、独り暮らしの生計のため、惣嫁のような仕事に勤めたのかもしれない可能性を想像させる場面となっているわけである。

以上、「身を捨て油壺」には、『一代女』へ発展されたと想定される面が潜んでいるのである。

## 5. 「身を捨て油壺」から『一代女』へ

短篇の「身を捨て油壺」から長篇の『一代女』へと、その構想が発展している可能性を述べてきたが、ここでは、その点について若干補足しておきたい。

まず『一代女』の構想から確認しておく。

ア、老女の過去を回想する懺悔物語の形式であること。

イ、女の一代記の形式であること。

老女の懺悔物語という構想は、先行文学に見られる懺悔物の形式を踏襲したものとされ、『七人比丘尼』『二人比丘尼』などに近い性格をもつといわれているが、直接的な影響は、色道の秘伝書である、延宝五年刊の『たきつけ草』『けしずみ』から受けているとされる。それは、冒頭部分で、二人の若者の問答を、作者とおもわれる第三者が書きとめている様子は、『たきつけ草』に通じ、以前は遊女であった老尼から色道の話の聞くという形式は、『けしずみ』と同趣であるためである。その外にも、用字や趣向の上で、『遊仙窟』『九相詩』などの影響がうかがえるとされる<sup>8)</sup>。

さて、女の一代記なる形式の構想については、先行作品の『一代男』と対比されることが指摘される一方<sup>9)</sup>、横山重氏（『好色一代女』一九八五年、岩波書店所収）は、『椀久一世の物語』は実在の蕩児を描き、『好色五人女』は巷説に基づき、市井の女性の恋愛事件を描いていることから、西鶴の関心が一般社会に向けられており、一女性の運命を描こうとしたのが、『一代女』を生むに至ったとする。

その上、『一代女』の主人公を、次のごとき職業につかせたのは、延宝六年成立の『色道大鏡』巻十四「雑女部」<sup>10)</sup>、延宝九年刊行の『都風俗鑑』、また貞享三年

8) (注1)と同書には、その他、『玉造小町子壯衰書』や、謡曲「関寺小町」「卒塔婆小町」などの影響も指摘される。

9) (注1)と同書及び、『井原西鶴集』（一）小学館、解説。

10)たとえば、『色道大鏡』巻十四「雑女部」には、次のような、職業の女性の生態が記述されている。

刊行の『好色訓蒙図彙』などの好色風俗の案内書の影響があり、また時代の好尚があったためであるとする<sup>11)</sup>。

舞子、武家の妾、島原の太夫、島原の天神・囀女郎、新町の局女郎、若衆姿の寺小姓・世間寺の大黒、女寺子の師匠、町人の腰元、大名の奥女中、歌比丘尼、武家屋敷の女髪結、嫁入りの介添女、武家屋敷の裁縫女・町方の仕立物屋、武家屋敷の茶の間女、町方の中居女、茶屋女・町人妾、風呂屋女、扇屋の女房・糸繰女・二瀬女、蓮葉女、暗物と据物（私娼）、茶屋女（古市）・出女、新町の遣手・夜発

『一代女』の構想に影響を与えた作品に関しては、上のような内容が通説となっており、首肯すべき説であると思われる。そうであるならば、何故、「身を捨て油壺」と『一代女』との関連性は、今まで問題にされてこなかったのだろうか。それは、「身を捨て油壺」が「姥か火」の伝説によった作品であるため、話の内容の半分が、それで占められていることなどが、理由として挙げられよう。

しかしながら、前述したように、独身女性の一生、しかも零落した老女を描いた、「身を捨て油壺」と『一代女』の共通点を見逃してはならない。横山重氏の意見とも重なるが、前述した通り、『一代男』では「惣嫁」に勤める女たちの描写のなかに、一生を独身で過ごす女性が見られる。当時の社会においてそういった女性の存在が西鶴の目にとまり、それが「身を捨て油壺」において主題として取りあげられ、『一代女』に至って、女一人の一生という長編となり完結されたのであろう。つまり、『一代女』に対する構想は、『椀久一世の物語』、『好色五人女』の完成の後に芽生えたというよりは、それ以前の、『諸国ばなし』 卷五の六「身を捨て油壺」を書き上げたときから存在したのではないかと考えられるのである。

## 6. おわりに

『諸国ばなし』と『一代女』は、刊行年代が一年しか隔たらないことから考えてみても、「身を捨て油壺」の内容や主題は、『一代女』を執筆していた作者の脳裏にあったと考えられる。多種多様な話を扱う『諸国ばなし』のなかで「身を捨て油壺」は、美女で

---

妻女、妾、扶助妾、月切女、出合者、寡婦、後家、腰本、御物師、半物付中居女、問屋破須波、乳母、風呂女、茶屋女、旅籠屋女、比丘尼、熊野比丘尼、釜被、瞽女、舞子、鹿子結、糸屋者、扇屋弟子、綿帽子売、釣者、曹伽

11) 横山重校訂(1985)『好色一代女』(岩波書店)など、前掲の注釈書の解説。

ありながら、縁をむすんだすべての男達が死去するなど、結局ひとり暮らしをしてきた老女の話であり、好色性がうかがえる「後家」という語が話の趣旨となっている。それゆえ、「身を捨て油壺」は、好色物の『一代女』に発展する可能性を充分もっていたと言っても過言ではないだろう。

なお、『諸国ばなし』と、それ以降の作品との関連性が指摘されているが<sup>12)</sup>、『一代女』との関連性をも視野に入れ、検討すべきであろうことを最後に付け加えておきたい。

## 【参考文献】

- 『井原西鶴集（二）』小学館  
『仮名草子集』 「新日本古典文学大系74」 (1991), 岩波書店  
「河内鑑名所記(巻五)」 『上方芸文叢刊3』 (1980), 八木書店. p.478-479  
『決定版対訳西鶴全集（三）』 明治書院  
『決定版対訳西鶴全集（五）』 明治書院  
『決定版対訳西鶴全集（十二）』 明治書院  
「好色物草子集」 『近世文芸資料第十』 (1968), 古典文庫  
『定本西鶴全集（第十一巻下）』 中央公論社. p.76  
野間光辰編 (1961) 『完本色道大鏡』 友山文庫. p.435-473  
—— (1983) 『刪補西鶴年譜考証』, 中央公論社. p.321  
前田金五郎(1986) 『西鶴大矢数注釈（第一巻）』, 勉誠社. p.372  
吉江久弥 (1964) 「『本朝桜陰比事』の原拠に西鶴自身のものがある」 『近世文芸』 第十号, 日本近世文学会. p.21-26  
横山重校訂(1985) 『好色一代女』, 岩波書店

12)たとえば、『桜陰比事』巻一の四「太鼓の中はしらぬが因果」のプロットや文章表現は、『西鶴諸国ばなし』巻一の三「大晦日はあはぬ算用」のそれに酷似しており、前者は後者に拠ったものである、という吉江久弥氏(1964)「『本朝桜陰比事』の原拠に西鶴自身のものがある」(『近世文芸』第十号)がある。

## 要 旨

本論は、『好色一代女』と、それ以前に刊行された『西鶴諸国ばなし』 卷五の六「身を捨て油壺」との関連性を考察した。『一代女』の構想は、古典や先行書などの影響があると言われてきた。たとえば、『一代女』 卷一の一「老女隠家」の発端の部分が、色道秘伝書の『たきつけ草』『けしずみ』と同じ趣向であることは定説化されている。しかし、その他の作品との関連性は未だ十分には論じられていない。このたびの考察の結果、「身を捨て油壺」の人物設定や主題が、『一代女』のそれと、類似することが判明した。それらを手がかりにし、『一代女』の原形が、『諸国ばなし』 卷五の六であった可能性について論じた。卷五の六「身を捨て油壺」が、女一人で一生を暮らしてきた老女の話であること、さらに話の趣旨が好色性がつよい「後家」にあることなどは、好色物の長編『一代女』への発展をうかがわせるものであった。『諸国ばなし』 刊行の一年後、『一代女』が出版されたことを考えても、前者は、後者の構想に関係したと考えるべきであろう。

キーワード；一代女、後家、好色性、一人暮らし、老女、原形

투 고 : 2008. 8. 31

1차 심사 : 2008. 9. 12

2차 심사 : 2008. 9. 27